

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00600

研究課題名(和文) 声調言語と非声調言語のリズム形成とイントネーションについて

研究課題名(英文) Rhythm and Intonation of tone languages and of non-tone languages

研究代表者

益子 幸江 (MASUKO, Yukie)

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：00212209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言葉のリズムの形成に關与する諸特徴を解明することが目的である。声調言語であるタイ語、ラオ語、ビルマ語、非声調言語であるインドネシア語、日本語を研究対象とした。基礎語彙500語について、声調言語の3言語については音節構造及び声調のデータベースが完成した。インドネシア語では情報構造の視点から持続時間やピッチの変化との関係を実証的に検討した。日本語ではアクセントと音調動態の関係について、自然な自発発話(制約をつけない)を用いて検討した。以上の研究から、リズムと關連する規則性が見られることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言葉のリズムについて、言語学的及び音声学的視点から可能なアプローチを行った。言葉のリズムが音響的な諸特徴を計測するだけでは解明できないことはすでに知られていたが、語の音声学的構成、声調やアクセント、統語的役割と表現意図の、音声学的・言語学的要因がリズム形成及びリズム感覺に關与的であることが示唆された。これにより、言語の様々な側面と音声との關りについての研究が進む道が示された。また、特に日本での外国語学習で、リズムだけを習得すれば発音がよくなるかのような俗説があるが、語の意味や表現なども含めて身につければ最終的にその言語のリズムが得られるという、語学習得の王道の証左となる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to elucidate the various characteristics involved in the formation of language rhythm.

Thai, Lao, Burmese, which are tonal languages, and Indonesian and Japanese, which are non-tonal languages, were studied. A database of syllable structures and tones has been completed for 500 basic vocabulary words and three tonal languages. In Indonesian, we empirically examined the relationship between duration and pitch change from the viewpoint of information structure. In Japanese, the relationship between accent and tonal dynamics was examined using natural spontaneous speech (without constraints). These studies revealed that regularity related to rhythm can be seen.

研究分野：音声学 実験音声学

キーワード：リズム形成 声調言語 東南アジア 音節 イントネーション 語

1. 研究開始当初の背景

言葉の音のリズム、というのは、音声学の分野で専門的に定義するのは難しい。しかし直感的に言って、音楽、とりわけ昨今の音楽についてであるが、リズムに乗せやすい言語とそうでない言語の別についてはある程度、認識の一致が認められるだろう。英語でのラップはカッコいいが、日本語でのラップは、よほど上手な人でないとカッコよくない、という意見もあり、言語による違いがありそうである。

それと関連するかのよう、日本人の外国語学習での思い込みの1つに、日本語はリズムに乗りにくいから外国語を学習する時には不利だ、という説があり、発音を通じないのを当然と考えるてしまう場合もある。

その一方で、日本語教育では、学習者の発音について、リズムが崩れたように感じられる場合があるということも言われる。これはつまり、リズムに乗せにくい言語であるはずの日本語に、リズムがある、という意味である。

リズムが無いかのような印象を持たれている日本語でも日本語としてのリズムがあるわけであり、すべての言語にはリズムがある、と考えるべきである。外国語学習でのリズムの崩れは、どの言語でもあり得ることである。

リズムをどのように定義すべきか。本研究ではリズムとは何らかのパターンが繰り返し現れ、それに要する時間がほぼ等しいと感じられる時の、そのパターンであるとした。

まず、メトロノームなどを思い浮かべてもよい。刻まれる間隔を音響的に計測すればほぼ等しい時間になる。計測できる時間の間隔が等しいことで、同じパターンが繰り返されていると感じる、物理量と感覚が一致しているからだ納得できるだろう。

問題の、言葉のリズムであるが、これも、あるパターンが繰り返され、その時間が等しいと感じられるものであるが、その持続時間を計測しても等しくはなく、かなりバラバラになる。それでも母語話者には、あるパターン、あるいはある種の単位が等間隔だと感じられる。そして、非母語話者の発話はリズムが崩れている、などと感じられる。しかし、時間的に等しいと思っている「単位」が、音響的な持続時間としては等しくないのに、その単位が等しいとか、リズムが保たれていると感じる根拠は何なのかは明確にされていない。

言葉のリズムを形成するパターンの性質は、持続時間だけではない要因が関係することが分かっている。それは超分節的要素である。これは、音の高低と音の強弱であり、音の高低は基本周波数値と、音の強弱はエネルギー量と、それぞれ関連があるとされるが、無関係ではないにしても、一致しない場合がかなりある。それは、等間隔の感覚と持続時間の関係に類似のように見える。

言葉の音の高低は、高低アクセントまたは声調という、語のレベルに関わる性質のものと、発話全体にかかってくるイントネーションの2種類が同時に存在する。

また、音の強弱は、強弱アクセントという語のレベルに関わる性質のものと、発話全体にかかってくる強調と非強調、がある。

上記のように、言語それぞれがリズムパターンを持ち、そのリズムパターンがどのように形成されるのか、分節音のレベルからイントネーションのレベルまで包括的に捉えて研究すべき段階に来ていると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、言葉のリズムの形成に関する諸特徴を解明することが目的である。分節音、モーラ、音節、フット、さらに、声調や高低アクセント、イントネーションを具体的な研究対象とし、それぞれが異なることで、リズムパターンの違いの分析、リズムパターンの形成の違いの分析を行う。そのために、音声的に異なるタイプの言語を研究対象とする。

声調言語(タイ語、ラオ語、ビルマ語)と非声調言語(インドネシア語、日本語)を対照することで、分節音の違い方、1音節語の多さ、意味のまとまりとなる単位の構成要素の違い、などを取り上げることができる。また、非声調言語は高低アクセントの言語(日本語)と無アクセントの言語(インドネシア語)という相違点がある言語を選択している。

3. 研究の方法

声調言語としては、タイ語、ラオ語、ビルマ語を取り上げた。1音節語が基本となり、2音節

以上の語は1音節語から成るものが多い。これらの声調言語の間での違いを観察した。

非声調言語としては、インドネシア語、日本語を取り上げる。日本語は高低アクセントの言語であり、声調言語と類似点がある一方で、多音節語が基本となるのでインドネシア語との共通点もある。インドネシア語は、無アクセント(強弱アクセントという説もある)の言語で多音節が基本であるが、接頭辞などの接辞が多く、1語の形成の点で日本語と異なる。

上に挙げた5つの言語について、それぞれの言語での、音に関連する様々な違いを考慮して、音声資料の収集と分析を進めた。言語ごとに個別に、代表者と言語担当者が、資料収集の段階から始めた。5つの言語のどれについても共通に取り上げられる方法を以下に挙げる。

- (1) 音節の形の種類を集め、どのような組み合わせがあるかを検討する。
 - (2) 意味のある単位、概ね「語」と言える単位について、その構成要素の制約を観察する。
 - (3) リズムの最小単位を形成する可能性のあるものを抽出する。
 - (4) 意味のある単位の組合せで成り立つ「句」と言えるような単位について観察する。
 - (5) リズム単位およびリズムパターンは複数あるので、どのような種類があるかを検討する。
- 言語によっては、複雑な検討事項が含まれる項と、問題なく進行できる項があることが予想され、その組み合わせも言語ごとに異なっていると考えられた。複雑な検討事項が出来た場合はその理由も含めて研究対象とし、資料収集を進め、分析・検討した。

4. 研究成果

本研究の調査対象の言語すべてに共通の成果について、また、共通の収集方法で得られる資料の利点について、まず説明しておく。

語の収集には、アジア・アフリカ基礎語彙調査票を用いることにした。この基礎語彙調査票は、アジアとアフリカの地域向けに作られており、文化的に大きく異なる欧米では取りこぼされる語彙が含まれる可能性が高いことが大きい理由である。また、この基礎語彙調査票が作成されてから今日までの間に、この調査票に基づいて調査された言語も多く、本研究の対象言語である、タイ語、ラオ語、ビルマ語は、過去の資料を利用することができた。

調査された時点から現在までの間の変化はあるので、本研究ではその点を注意深く確認し、若いインフォーマントの音声を収録して資料として用いている。

各言語で、語を構成している音節の形、および音節を構成している分節音の形を抽出した。また、それらの頻度も計っている。500語という数ではあるが、かなり基本的な語彙なので、使用頻度も高いことが見込まれる。現実の発話の中ではこれらの形が果たす役割は大きいと考えた。言語によっては、1語の中の、第1音節と第2音節以降、および最終音節とで現れる分節音や音節の形が異なったり制約を受けたりすることもある。その点の観察も行った。軽音節や、軽音節化についても、実際の音声を収録することで確実に資料を集めることができた。

先に述べた理由により、各言語において、統語論的分析、意味論的分析、言語運用上の表現意図の分析も行っている。

以下に、各言語の成果を述べる。

(1)タイ語

アジア・アフリカ基礎語彙調査票に基づいて、タイ語の基礎語彙500語の声母、韻母、音節構および声調のデータベース化を行った。これらの語については、母語話者による録音を行い、これに基づいて音韻環境の分析を行った。基礎語彙の録音にあたっては、ターゲットの単語の声調への影響が少なくなるように、キャリアセンテンスを作成した。

(2)ラオ語

アジア・アフリカ基礎語彙調査票に基づいて収集したラオ語基礎語彙のデータをもとに、各音節数別の語数(1音節語の数、2音節語の数、3音節語の数)を数えることから始め、声母、韻母、音節構および声調のデータベース化を行った。韻の組み合わせは、理論的には可能であっても存在しない形、あるいは稀な形など、語彙的にも偏りがある。ラオ語の実在する音節の形について整理する過程では、近隣の言語とそれらの古い形からの流入といった、語源の知識が必要であるものから、現在までの社会的交流による変異・変化まで考慮し、その特徴についてまとめることを試みた。特にSNSなどによるグローバルな交流は社会言語学的にもこれまでにない変容をもたらしていると推測できる。

(3)ビルマ語

『言語調査票2000年版』(http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm)に基づいて作成したビルマ語基礎語彙表(3641レコード)のうち、2726項目について、その音節数(1-14)、母音の直前に現れる子音、音節の種類(開音節、閉音節(促音)、閉音節(撥音))

声調（4種＋中和したもの1種）およびその連結パターン、組み合わせ、語彙構造についてのデータ処理が終了した。全ての項目のデータ処理終了後に改めてパターンの抽出を行うが、現時点で全パターンの組み合わせが生じ得るのはおおよそ4音節までであることが判明した。

(4) インドネシア語

インドネシア語およびスンダ語の情報構造と音声的特徴との関係について、収集した言語資料に基づき分析を進めた。両言語について、音声的特徴が情報構造に与える影響に関して、ピッチパターンや持続時間のリズム形成への関わり方という観点から分析を進めた。一方で、日本語話者のインドネシア語習得における発音の問題点について発表を行い、それに基づく論文を執筆した。

(5) 日本語

日本語アクセントの音調動態を明らかにするため、指示された語やテキストを読み上げる音声ではなく、発話を制約しない自発発話音声を用いてそのピッチ周波数時間特性から音調の動態を分析した。その結果、以下の点が明らかになった。

発話の音調様式には、ピッチの急峻な上昇を伴う卓立型音調様式と、平坦かつ単調でメリハリのない非卓立型音調様式があり、従来提示されてきた句全体に渡って漸次的に下降するピッチ特性の上に、アクセント固有のピッチパターンが重畳するというモデルは必ずしも成り立たない。

アクセントを含む主音調は4 ST (semitone セミトーン)より高い音調領域で展開し、4 ST から0 ST に至る低い音調下降領域は、句や発話をまとめて終結感を与える領域となっている。

アクセントに関わる音調下降位置がしばしば後続拍上にずれる「遅下がり」現象は、音調の制御が音節内母音の onset 近傍と同期して開始されることと密接に関連する。

また、東京方言話者の音調動態特性と比較・対照するため、共通語に近いと言われる内陸型北海道方言について、基本語彙のアクセントと共に、動詞・形容詞の活用、助数詞・接尾辞の接続、語構造等とアクセント音調との関連について検討も進めた。その結果、東京方言ではアクセントは語尾から数えて3番目の音節位置(antepenultimate)にアクセントが置かれる傾向があるが、北海道方言では語尾から2番目の音節位置(penultimate)にくる傾向の強いことを明らかにした。このアクセント音調が北海道方言らしさの音調感覚と深く関わっていることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鈴木玲子	4. 巻 4
2. 論文標題 ラオ語の主題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 17-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 峰岸真琴	4. 巻 4
2. 論文標題 東南アジア諸言語の情報構造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡野賢二, 野元裕樹, スニサーウィッターヤーバンヤーノン, トゥザライン, 春日淳	4. 巻 1
2. 論文標題 アジア三言語における代名詞代用・呼びかけ語の共通項目調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語処理学会 第28回年次大会 発表論文集	6. 最初と最後の頁 69-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 降幡正志	4. 巻 4
2. 論文標題 インドネシア語における焦点化の手段：日本語の分裂文との対照	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 降幡正志	4. 巻 1
2. 論文標題 依頼のEメール・インドネシア語解説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際日本研究への誘い - 日本をたどりなおす29の方法	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FURIHATA, Masashi	4. 巻 -
2. 論文標題 Dilema antara Desakan Standardisasi Bipa dan Praktik Pengajaran	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Prosiding Konferensi Internasional Pengajaran Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing (KIPBIPA) XI 2019	6. 最初と最後の頁 26-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 降幡正志, 原真由子, 森山幹弘	4. 巻 26
2. 論文標題 インドネシア語応用教材に関する共同研究からの報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 インドネシア 言語と文化	6. 最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 降幡正志	4. 巻 26
2. 論文標題 インドネシア語の情報構造に関するいくつかの事象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外大東南アジア学	6. 最初と最後の頁 97-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/95677	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木玲子	4. 巻 -
2. 論文標題 ラオス語初級会話学習書の比較研究 - 文化的社会的特質に着眼して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア諸国の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したCEFR能力記述方法の開発研究	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 玲子、スズキ レイコ、SUZUKI Reiko	4. 巻 26
2. 論文標題 ラオ語の語順と情報構造	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外大東南アジア学 = Southeast Asian Studies Tokyo University of Foreign Studies	6. 最初と最後の頁 43 ~ 75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/95674	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 大和、サトウ ヒロカズ、SATO Hirokazu	4. 巻 25
2. 論文標題 自発発話音声から見た日本語音調の動態 (論文)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集 (Journal of the Institute of Language Research)	6. 最初と最後の頁 1 ~ 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/100154	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峰岸 真琴、ミネギシ マコト、MINEGISHI Makoto	4. 巻 13
2. 論文標題 タイ語と日本語の時の表現の対照	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語・日本学研究 / 東京外国語大学国際日本研究センター [編] (Journal for Japanese studies)	6. 最初と最後の頁 175 ~ 197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/124983	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峰岸真琴	4. 巻 -
2. 論文標題 言語・文化・社会から見た CEFR 評価: 現代日本の社会課題問題解決に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したCEFR能力記述方法の開発研究」最終報告書	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野元 裕樹、ウィッタヤーパニヤノン(齋藤) スニサー、岡野 賢二、ノモト ヒロキ、ウィッタヤーパニヤノン サイトウ スニサー、オカノ ケンジ、NOMOTO Hiroki、WITTAYAPANYANON SAITO Sunisa、OKANO Kenji	4. 巻 25
2. 論文標題 代名詞代用・呼びかけ表現研究の現状: タイ語, ビルマ語, マレー語, インドネシア語, ジャワ語, 朝鮮語 (研究ノート)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集 (Journal of the Institute of Language Research)	6. 最初と最後の頁 63~78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/100158	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峰岸 真琴、ミネギシ マコト、MINEGISHI Makoto	4. 巻 11
2. 論文標題 音韻体系の対照と外国語教育 日本語, タイ語, カンボジア語を例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語・日本学研究 / 東京外国語大学国際日本研究センター [編] (Journal for Japanese studies)	6. 最初と最後の頁 23~40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/100255	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峰岸真琴	4. 巻 1
2. 論文標題 タイ語の時と出来事の表現	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要. 54	6. 最初と最後の頁 347 - 362
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野元 裕樹、ウィッタヤーバンヤーン(齋藤) スニサー、岡野 賢二、ノモト ヒロキ、ウィッタヤーバンヤーン サイトウ スニサー、オカノ ケンジ、NOMOTO Hiroki、WITTAYAPANYANON SAITO Sunisa、OKANO Kenji	4. 巻 25
2. 論文標題 代名詞代用・呼びかけ表現研究の現状：タイ語、ビルマ語、マレー語、インドネシア語、ジャワ語、朝鮮語（研究ノート）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集 (Journal of the Institute of Language Research)	6. 最初と最後の頁 63～78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/100158	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤大和、山崎亜希子	4. 巻 1-9-2
2. 論文標題 アクセントから見た北海道ことばの音調の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本音響学会2022年秋季研究発表会講演論文集	6. 最初と最後の頁 995-996
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山幹弘、原真由子、降幡正志	4. 巻 28
2. 論文標題 コーパス・データを用いたインドネシア語応用教材の開発における課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 インドネシア 言語と文化	6. 最初と最後の頁 105-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masashi Furihata	4. 巻 20
2. 論文標題 CATATAN TENTANG PENGAJARAN LAFAL BAHASA INDONESIA TERHADAP PENUTUR JATI BAHASA JEPANG	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Prosiding Konferensi Linguistik Tahunan Atma Jaya (KOLITA)	6. 最初と最後の頁 1～9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.25170/kolita.20.3771	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峰岸真琴	4. 巻 1
2. 論文標題 タイ語の事象キャンセル	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル	6. 最初と最後の頁 141-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 峰岸真琴
2. 発表標題 カタチと運用から見た言語のあり方
3. 学会等名 「宮岡文庫」開設記念特別企画公開シンポジウム「地球規模の言語研究から日本語を再考する」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 峰岸真琴
2. 発表標題 タイ語とクメール語のAspect 進行・継続を中心に
3. 学会等名 言語の類型的特徴対照研究会 第17回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 峰岸真琴
2. 発表標題 タイ語と日本語のAspectの対照の試み
3. 学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター第34回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masaaki Shimizu & Makoto Minegishi
2. 発表標題 Animal vocabulary in Austroasiatic
3. 学会等名 アジアアフリカ地理言語学研究 2021年度第1回研究会 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Makoto Minegishi & Masaaki Shimizu
2. 発表標題 Crops in Austroasiatic
3. 学会等名 アジアアフリカ地理言語学研究 2021年度第2回研究会 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 峰岸真琴
2. 発表標題 南から言語学を見る
3. 学会等名 アジア・アフリカ言語文化研究所フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡野賢二, 野元裕樹, スニサーウィッタヤーバンヤーノン, トゥザライン, 春日淳
2. 発表標題 アジア三言語における代名詞代用・呼びかけ語の共通項目調査
3. 学会等名 言語処理学会 第28回年次大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 降幡正志
2. 発表標題 用例における対象語と共起：語の属性や語句間の関係について
3. 学会等名 第52回日本インドネシア学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 降幡正志
2. 発表標題 インドネシア語の情報構造
3. 学会等名 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会』第13回研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 降幡正志
2. 発表標題 スンダ語の研究に関する覚え書き
3. 学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター夏季セミナー2020（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 降幡正志
2. 発表標題 インドネシア語とスンダ語の情報構造について
3. 学会等名 インドネシア日本語教育学会第2回国際研究大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 峰岸真琴
2. 発表標題 情報構造と焦点化研究の概要
3. 学会等名 「言語の類型的特徴をとらえる対照研究会」第13回研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Makoto Minegishi & Masaaki Shimizu
2. 発表標題 Grammatical relations in Austroasiatic
3. 学会等名 「アジアアフリカ地理言語学研究」2020年度第2回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 益子幸江
2. 発表標題 音声学の活かし方 - 音声教材と音声研究 -
3. 学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター『外国語と日本語との対照言語学的研究』第32回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤大和
2. 発表標題 アクセントから見た北海道ことばの音調の特徴
3. 学会等名 日本音響学会2022年秋季研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 FURIHATA, Masashi
2. 発表標題 Catatan tentang Pengajaran Lafal Bahasa Indonesia terhadap Penutur Jati Bahasa Jepang
3. 学会等名 Konferensi Linguistik Tahunan Atma Jaya Kedua Puluh (KOLITA20) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 峰岸真琴
2. 発表標題 時の表現と語用論 南からの視点
3. 学会等名 神戸市立外国語大学公開講演会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 峰岸真琴
2. 発表標題 言語の分析と対照法について 時と出来事の表現を例に
3. 学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター第38回研究会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masaaki SHIMIZU, Makoto MINEGISHI
2. 発表標題 System of 'Sibling' terms in Austroasiatic
3. 学会等名 「アジア・アフリカ地理言語学研究」2022年度第 1 回研究会 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Makoto MINEGISHI, Masaaki SHIMIZU
2. 発表標題 Numeral Systems in Austroasiatic
3. 学会等名 「アジア・アフリカ地理言語学研究」2022年度第 2 回研究会（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 降幡 正志、原 真由子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 162
3. 書名 ニューエクスプレスプラス インドネシア語《CD付》	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	峰岸 真琴 (MINEGISHI Makoto) (20183965)	東京外国語大学・その他部局等・名誉教授 (12603)	
研究分担者	鈴木 玲子 (SUZUKI Reiko) (40282777)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	降幡 正志 (FURIHATA Masashi) (40323729)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 大和 (SATO Hirokazu) (50401550)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員 (12603)	
研究分担者	岡野 賢二 (OKANO Kenji) (60376829)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関